続郷土研究入門講座

第四講　町村史の編纂（一）

印牧邦雄

はじめに　本誌の編集者より「三国町史編纂の体験を述べ、今後この種の事業をやろうとする人の参考にしてほしい」との依頼があった。私は既に三国町史の編集後記を書いているので、詳しくはそれを読んで頂くとして、今迄に刊行された、県下の町村史（誌）の編纂に就いて述べ、更に三国町史にも触れて、今後この種の事業に携わる方々の参考に供したいと思う。

編修の動機　戦前に県下で刊行されたいわゆる郷土誌は、鷹巣村誌・豊村誌・吉川村郷土誌・上池田村誌・南中山村誌等で、戦後に比べて余り振わなかったようである。しかし、一方では福井県史のように、地方史の白眉と称せられるものも刊行されている。戦後になると、町村史（誌）の編纂が俄然活況を呈し、現在までに二十余の町村史（誌）が刊行されている。その中には岡本村史のように、戦前に編纂が行なわれ、途中で編纂者が死亡して中止となり、戦後別な編纂者の手で、刊行されたようなものもある。

戦前いち早く編纂が始められたのは大野町史で、二十二年から二十九年までの間に、六輯を重ねている。戦前には偶然の事情等から郷土研究が行なわれ、編纂に至つたものが多かったが、戦後刊行された町村史の多くは、町村合併と深い関係をもって編纂が行なわれているようである。坂井郡に例をとると、二十七年から三十九年にかけて、鳴鹿村誌・伊井村誌・劒岳村誌・浜四郷村誌・金津町史・木部村誌・細呂木村誌・川西町史・三国町史の順で刊行されている。この時期は他郡の場合でも大体同様で、恰も町村合併の時期にあたっている。即ち、二十八年の町村合併促進法が施行された当時、県下には百五十もあつた市町村が、四十一市町村に激減しており、この様な町村合併が、各町村に在住または在職す

る有識者を刺激して編纂に至らしめ、町村史ブームを起したものと思われる。そして町村合併によって消失する村名へのノスタルジアが、特に村誌編纂へかりたてたこともあろう。中には浜四郷村誌や木部村誌等のように、合併後に持越された例もある。勿論町村合併前より、編纂意欲を持ち続けた人もあるが、町村合併が地域社会に対する、歴史意識をたかめたことは事実である。

三国町史の場合、二十五年より旧三国町内で史料収集を始めたが、三十一年になつて本格的な編纂に入いり、合併した村落を含めて町史編纂を行うことになった。当初は旧三国町だけで編纂を行うつもりであったのが、町村合併により周辺村落まで拡大しなければならず、予想外の事業となってしまった。千二百年の港史をもつ三国町では、これまでに何回も町史編纂が企図されながら結実しなかったので、町当局者や有識者の間に、自ら町史編纂を要望する声がたかまり、町村合併がそれを促進したわけである。けれども、これから始めて町村史（誌）を編纂するか、或はこれまでに編纂された町村史（誌）を書き換えるために編纂に携わる方々は、視野を広くして、それぞれの地域社会が歩んできた道をかえりみると共に、将来への指針として役立て、更にまた日本史上に占める意義をも究明する態度で編纂に当り、日本史の研究をより推進してほしいものである。

委員会の設立　町村史編纂の必要がおこれば、委員会を設置することになる。編纂委員会は公民館や役場に設けられるが、名称は片上村誌のように刊行会とか、三国町史のように、編纂委員会等と称して一定していない。

戦後は大抵、教育委員会に所属して、予算も教育委員会費に盛る場合が多い。委員数は豊村誌が五、森田町誌が十、木部村誌が十八人からなり編纂の規模等で一定していない。三国町史の場合は会長一、副会長一、委員長一、執筆委員三四、嘱託一となっている。武生市史や三国町史のように、大規模な編纂事業を行うところでは、嘱託をおいて庶務とか資料収集を担当させている。

次に編纂者のスタッフをみると、岡本村史や西田村誌、それに最近の武生市史のように、歴史学者が中心となり、若干の編纂委員を率いて編纂に携わる場合もあるが、一般に小中学校の在職者または退職者の手で編纂される場合が多い。在職中に編纂されたものでは、伊藤尚一氏の鳴鹿村誌・金津町史、斉藤与次兵衛氏の伊井村誌、野村英一氏の東藤島村誌、山本正義氏の中藤島村誌等である。鳴鹿村誌や中藤島村誌は、校長が中心となり同じ職場の教員と共に、編纂に携わっている。また退職者の手で編纂された例として、斎藤秀助氏の大野町史、川端太平氏の川西町史、坂本豊氏の細呂木村誌等を挙げることが出来る。これらは十年近い歳月と労力を費して編纂が行われており、編纂者の労苦は勿論のこと、退職者であることが、この種の事業に没頭することを可能ならしめたのである。最近小中高校の教員とも、校務に追われ編纂に携わることは容易ならざるものがある。小中学校教員に比べると、高校教員でこれに携わる方は極めて少い。編纂の主宰者ではないが、西田村誌の平泉洸氏、常盤郷土誌の山口信嗣氏、武生市史の斎藤嘉造氏等が数えられるに過ぎない。編纂者は教員のみでなく、浜四郷村誌の大西誠一氏や吉野村史の斎藤槻堂氏等のように教職に無関係な方

で携わった方達もあり、或はまた加藤真一氏の吉川村郷土誌のように、役場吏員の手で編纂された珍しい例もある。

たゞ郷土人でなければ、郷土のことが解らないと云うのではなく、かえって日本史全体を見まわしている人の方が、その地域のもつ特質なり意義を明らかにしてくれることもある。例えば岡本村史は京大の小葉田淳氏が中心となり、岸俊男氏、宮川満氏等、県外の大学関係者が執筆にあたり、優れた村史を編纂している。だが同村史は「現地を離れては特に近代史に関する調査も記述も甚だ困難である」と云う理由をもって明治初年で擱筆している。これは同村史のためにも遺憾なことで、やはり中央と地方とが提携して編纂事業を行うことが望ましいのではないか。財政等の事情で、それが困難な時は、金津町史が大久保道舟氏に、剱岳村誌が佐久高士氏に校閲を受けているように、歴史学者の指導を受けた方が良心的だと思う。

三国町のように、旧港町の歴史を編纂する場合、都市と商業史の専門家を指導者に迎えた方がよいと考え、東北大の豊田武氏を委員長に迎えたわけである。他の町村史を編纂する場合でも、それぞれに適した専門家がおられるわけであるから、そう云う方の指導を受けたらよいと思う。三国町史が従来の町村史と違って県内外の専門家を多数執筆陣に加えているのは、三国が郷土史の範囲を越えた研究対象の価値をもっているからでもある。これには多額の経費が必要であり、どの町村にでもできることではないと思う。

資料の収集　それぞれの地域社会の生活や文化がどのように発展してきたか、またどこに問題点があるか等と云うように、問題意識をもって調査研究を進めるべきである。従って基礎的な重要作業である資料の収集に当たっては、先人が如何なる環境で生活してきたかを念頭において行うべきである。例えば歴史地理学的研究により各時代の生活環境を復原するための資料を得たり、考古学的な遺跡遺物を調査研究して古代生活を復原する資料を得たりする。だが町村史編纂のために遺跡を発掘することは、文化財保護の上からいって問題があるから、従来発見されている遺跡遺物等を改めて調査研究するのも一方法である。また社寺建築や仏像、仏画等を調査研究して、それぞれの時代の精神生活を探究する資料を得ること等も必要である。けれども、個人でこれ等の知識を一通り持つことは容易ではないから、県が出している文化財報告書等を参考にしたり、直接その道の専門家に教えを乞うたりすればよい。

何と云っても歴史研究の資料としては、文書、記録類が最も重要である。史料の取扱等に慣れない人は、その収集・筆写は困難な作業であるから、文部省や県立図書館主催の史料取扱講習会を受講することが望ましい。

単にその町村に所在する史料だけでなく、可能な限り広範囲に収集すべきで、極力町村内外に所在する史料を収集し、悔いのないよう努力すべきである。史料収集に当たっては、先づ岩波全書の地方史研究必携等を読んでから、佐久高士氏の越前国地方文書研究序説や、京大国史研究室の南条郡、丹生郡等の古文書目録等を一通り見る必要がある。その他、中央で出している大日本史料・大乗院寺社雑事記等や直接本県と関係のある若越古文書選、敦賀郡古文書郷土叢書等を参考にするのもよい。理想的には史料取扱に慣れた人を委嘱して行けば

政治や民俗等について、聴取調査をすることも緊急を要することである。三国町史の場合は、地元の文書、記録類の筆写を主に光成実氏、史料館や東北大学に所蔵されているものは、主に豊田武氏が収集に当たられた。他に累次の総合調査を行ない、考古学・地理学・民俗学・美術史学等の豊富な資料を得ることが出来た。何ずれ史料篇を出すことになっているが、原稿や史料はロッカーに入れ保管する計画である。

よいのであるが、そのようなことはなかなか困難であるから、やはり忍耐と努力をもってこの種の作業に当たらねばならない。私は鳴鹿村誌の編纂に携わられた伊藤尚一氏が、公務のかたわら苦心して史料の筆写を行われ、一時眼を悪くされたことを聞いたことがある。私自身もこの地味で苦労の多い仕事を体験しているので、その労苦を理解することが出来る。史料の採訪を行う場合、特に所蔵者の協力が必要で、それが為には終始責任をもって事に当たらねばならない。時間に制約されているような場合は、史料を複写し、あとでフィルムまたは印画をもとにして筆写を行えばよい。やはり資料収集を成功させるには、個人の努力の他に、各町村当局者や所蔵者が、この種の事業に理解と協力をしてくれることである。収集・筆写した史料は喪失乃至散逸しないよう保管すべきで、編纂が終ればどうなってもよいものではない。福井県史編纂の史料は既に喪失しているときいているが、多くの町村史の編纂史料はどうなっているだろうか。出来れば岡本村史や武生市史等のように、編纂者は史料篇を出してほしいものである。この他故老等より町村の